

健康と医療について語り合う会

糖尿病の合併症 学習会開催

神戸支部も協力する聴覚障害者の医療を考える会(いのちを考える会)11月27日に、あすてっぷKOBEで学習会を開催。王子眼科クリニックの三浦昌生先生が「糖尿病性合併症～糖尿病網膜症～」をテーマに講演し、21人が参加した。参加者の感想文を紹介する。



聴覚障害者など21人が参加して学習



講師の三浦昌生先生

以前から糖尿病は怖い病気でも目にも影響があると聞いておりました。糖尿病とは、インスリン作用不足による慢性の高血糖状態の代謝症候群と学びました。原因は、遺伝的なもの、食事・運動・肥満・ストレス等の環境の原因があります。目の病気としては、糖尿病網膜症があります。網膜症の発症、進行の危険因子として糖尿病にかかった期間、高血糖、高血圧、高脂血症があります。かかった期間とは、糖尿病と診断されてからの期間をいいますが、この期間がとても重要だそうです。

私たちは、空腹時の血糖値を検査で聞いて安心しておりましたが、食後2時間くらいの血糖値も知っておく必要ありと聞いております。HbA1cという項目だそうです。私はまだこの項目の検査は受けていないので、一度検査の時に加えていただきたく考えています。この数値は6を目指すといいそうです。

もし目に異常を感じたら、即、診察を受けて治療に専念しなければ失明の危機に陥ることになります。その他に、白内障、緑内障の病気があります。私は、白内障は、高齢によるものとばかり思っていました。糖尿病の合併症による白内障があると知りました。糖尿病がとても合併症を多く発症する病気と学び、まだまだ知識のないことが多くあると思いました。日常生活で食事・睡眠・運動に心がけて自分の身体を大切にしたいと思いました。

【参加者・林 節子】

兵庫県保険医協会

278号 2015年2月25日

神戸支部ニュース

発行 兵庫県保険医協会神戸支部

連絡先 〒650-0024 神戸市中央区海岸通1-2-31 神戸フコク生命海岸通ビル5F
兵庫県保険医協会 TEL/078-393-1801 FAX/078-393-1802

震災20年メモリアルシンポジウム

創造的復興の問題点学ぶ

被災者に寄り添った復興を訴え



シンポジストの古川美穂氏(左上)が「創造的復興」の問題点を批判
シンポジウムには医師・歯科医師を中心に65人が参加し、協会・保団連の運動を振り返った

阪神・淡路大震災から20年となる1月17日、協会は神戸でメモリアルシンポジウム「巨大災害と人権保障」を開催。65人が参加し、企画を通じて震災からの20年を振り返った。ライターの前川美穂氏、住江憲勇保団連会長、武村義人兵庫協会副理事長、ひょうご福祉ネットワークの正津房子氏の4氏が講演し、被災者に寄り添った復興の大切さが語られた。

ライターの古川氏は、「創造的復興」について、神戸医療産業都市を例に挙げ、震災に乗じて規制緩和を進め、企業が利益を上げようとするものであると批判。そして、東日本大震災後も同様に、

住民のゲノム情報を収集・分析する東北メディカルメガバンク構想、仙台空港の民営化、カジノ構想などが復興事業として進められており、一方で窓口負担免除
----- (2面に続く)

(1面から続く)



シンポジストの4氏 左から武村義人副理事長、住江憲勇保団連会長、古川美穂氏、正津房子氏

措置が打ち切られるなど被災者が置き去りにされていると述べた。

住江憲勇保団連会長は、阪神・淡路大震災後、公的保障を求める兵庫県の運動

を支援する中で、「災害被災者支援と災害対策改善を求める全国連絡会(全国災対連)」が結成され、被災者生活再建支援法成立・改善運動、被災地の運動・交流に取り組んでいると語った。

武村義人兵庫協会副理事長は、開業医・協会の運動をふりかえり、公的保障を求め、被災者の患者負担免除措置や民間医療機関への公的支援、診療報酬の概算請求などを実現してきたと紹介した。

ひょうご福祉ネットワークの正津房子氏は、仮設住宅・復興住宅の巡回相談を20年間継続しており、住民の高齢化が進む中、生活困難や健康不安といった深刻な相談が寄せられていると紹介した。



1・17長田メモリアルウォーク・明日へ語り継ぐ集い

震災20年の長田を歩いて経験語り継ぐ



長田駅南の地下街を見学する参加者 テナントには空きが目立つ

協会神戸支部も参加する震災復興長田の会は、阪神・淡路大震災から20年となった1月17日に、「1・17長田メモリアルウォーク 明日へ語り継ぐ」を、翌18日には新長田勤労市民センターで「明日へ語り継ぐ集い」を開催した。震災から20年が経過した長田区の見学や、震災当時の様子についての交流が行われた。

----- (3面に続く)

(2面から続く)

メモリアルウォーク

なかなか進まない心の復興



高層ビルやマンションなどが建ち並ぶ中、震災後空き地のままの土地も見られる

阪神・淡路大震災時に大規模火災により焼け野原となった長田区で行われた「1・17長田メモリアルウォーク 明日へ語り継ぐ」には、震災20年の区切りの年ということもあり、全国から例年を大きく上回る120人が参加。20年が経過してもなお、阪神大震災からの復興という問題への関心の高さがうかがえる。ウォークの参加者は、巨大な再開発事業で商業ビル、マンションが立ち並ぶものの、テナントには空きが目立ち、かつてのにぎわいとはほど遠い街の姿を見学した。

感想交流では、地元の病院の看護師は、「野戦病院のようだったあの日を、今も夢に見る。20年経つが街の活気はみられず、住民の方の心の復興はなかなか進まない」と感想を述べた。

20年を記念し、住民の手記を集めた文集も発行された。前号の支部ニュースで紹介したとおり、協会からも会員6人がそれぞれの思いを寄稿している。

明日へ語り継ぐ集い

被災者支援を求める運動の経過など交流



和太鼓の演奏から企画が始まった

翌18日には、新長田勤労市民センターで「明日へ語り継ぐ集い」が開催され、会場いっぱいの174名の市民が参加した。参加者は各テーブルごとに分かれて、提供された軽食を食べながら震災体験などを交流した。

集いは、和太鼓の演奏から始まり、途中には琉球舞踊の鑑賞や市民によるハーモニカの演奏など多彩な企画が設けられた。

集いの中で、復興県民会議の岩田氏が震災発生以降の活動についての講演を行った。長田区では、震災が起こっていち早く震災復興長田の会が結成され、20年間にわたり、自転車キャラバンによる上京しての要請行動、長田メモリアルウォーク、借り上げ住宅問題について市長への要請など、多彩な運動をこれまで行ってきたことが報告された。

集いには来賓として堀内照文衆院議員と森本真神戸市議員が挨拶した。

